



TITLE:

# 平沼騏一郎と近代日本政治－司法 官僚の政治的台頭と太平洋戦争へ の道－(Abstract\_要旨)

AUTHOR(S):

萩原, 淳

---

CITATION:

萩原, 淳. 平沼騏一郎と近代日本政治－司法官僚の政治的台頭と太平洋戦争への道－. 京都大学, 2015, 博士(法学)

ISSUE DATE:

2015-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k18748>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開; 許諾条件により要約は  
2016/03/01に公開

( 続紙 1 )

京都大学	博士（法学）	氏名	萩原 淳
論文題目	平沼騏一郎と近代日本政治 —司法官僚の政治的台頭と太平洋戦争への道—		
(論文内容の要旨)			
<p>平沼騏一郎は大正から昭和戦前期の官僚・政治家である。司法省入省後、約10年間検事総長に在任、司法省・検察の実権を掌握した。その後、1920年代に平沼は法相や枢密院副議長に就任し、国本社会長にもなった。1936年に枢密院議長に昇格した後、1939年には首相に就任、首相辞任後も、敗戦に至るまで重臣として活動し、戦後A級戦犯となった。</p> <p>本論文は、これまで十分に分析されてこなかった平沼の司法官僚時代や、太平洋戦争中と戦後も含め、できるだけ一次史料に基づき平沼騏一郎の政治思想・秩序観と政策や政治手法を分析する。</p> <p>序章では、平沼が太平洋戦争への道に与えた政治的影響等について、研究史の整理と本稿の課題について述べた。</p> <p>第一章から第三章では、司法省時代の動向を明らかにした。平沼は非山県系の官僚として、政友会と連携し司法部改革や検察権の柔軟な運用を行い、司法部における権力基盤を確立した。ただ、平沼が政友会に協力したのは司法権の強化を目指したために過ぎなかった。平沼は天皇主権説を支持し、政党内閣を嫌い、一貫して官僚的権限を擁護した。平沼にとって転機となったのが第一次大戦後の政治秩序の変動である。すなわち、外交では欧米との協調が主流となり、内政では政党が権力を増大させ社会運動が高揚し共産主義運動も広まったことである。平沼は人種論の立場から欧米に不信感を持ち、国際連盟にも否定的だった。また、政党と社会運動についても秩序の動揺をもたらすと警戒した。共産主義に対しては天皇制を破壊するものであると敵視した。</p> <p>第四章では1920年代の平沼の政治運動・政治手法を明らかにした。平沼は国本社が教化団体であることをアピールしたが、実際には脆弱な政治基盤を強化し、官僚から政治家へと転身を図る意図があった。また、平沼は法相辞任後、首相や将来の宮中入りを狙い、薩摩派や政友会等に接近して政治基盤の強化を図った。さらに、平沼は田中義一内閣に対しては、満蒙政策や反共等の政策で一致したため、協力関係を構築した。しかし、平沼は元老西園寺公望の信頼を得られず、彼の目論見は失敗に終わった。</p> <p>第五章では、1930年代の平沼内閣運動における政治手法と政治的影響を明らかにした。平沼は浜口雄幸内閣での疑獄事件の続発を受け、政党内閣に反感を強めた。ロンドン条約問題では英米への不信感から条約締結に反対し、統帥権問題で軍部の官僚的権限を擁護した。その後、平沼はロンドン条約反対派の陸海軍人を提携相手とし、首相の座を狙った。平沼は軍部を抑え得る文官であることをアピールする一方、軍部に対しても協力姿勢を示すことで、双方から支持を獲得しようとした。しかし平沼の本</p>			

質が、後継首相推薦や宮中の人事の実権を握る元老西園寺に見抜かれ、西園寺から忌避されて首相になることは挫折した。また平沼が軍部と進めた政策は、軍部のセクショナリズムを促進させ、軍部の統制を弱める結果となった。

第六章では、首相時代の政治指導を論じた。平沼は、外交では陸軍とともにソ連を対象とする日独防共協定強化を推進し、親英米路線とはいえなかった。内政では、共産主義への懸念から陸軍が主導していた政治制度・機構の改革を否定した。

第七章では、平沼は内閣総辞職後、重臣として後継首相推薦に関わり、一貫して近衛文麿に期待を寄せたことを示した。また、対米関係改善を目指し、松岡洋右外相と対立したことは、アメリカから一定の評価を得るものの、南部仏印進駐などで国際情勢判断を誤った。戦時中、平沼は開戦に際して曖昧な態度を取るが、サイパン陥落を機に東條英機内閣倒閣工作に参加する。その後、戦争終結の必要を認識するが、アメリカ側の天皇を問責するという報道を受け、天皇制を護持出来なければ徹底抗戦することや戦争終結運動への弾圧を訴えた。ポツダム宣言受諾においても、再照会説を主張するなど、混乱を招いたことを指摘した。

第八章では、東京裁判から死去するまでを分析した。国際検察局は共同謀議の論理のもと、平沼が満州事変以後の日本の軍事政策に関与し、特に首相時代に日中戦争の遂行を重視したことを指摘した。裁判において、平沼の弁護側は有力な反証が出来ず、判決は検察側の論理を全面的に踏襲したものであった。他方、平沼は戦争責任について、西園寺や政党の失政が軍部の台頭を招いたとする考えを変えず、自らの責任を自覚していなかったことを指摘した。

終章では結論を示す。平沼は司法官僚時代から、思想的というより強い権力志向を持った政治家であり、むしろ機会主義的でした。脆弱な政治基盤を強化するため、状況に応じて提携相手を変えることで政治的影響力を維持しようとした。しかし平沼は、外交・内政への十分なヴィジョンがなく総合調整能力も不十分で、十分な権力を得ることに失敗し、政党政治や政党の力を弱め軍部の台頭を促進しただけに終わった。

(続紙 2 )

(論文審査の結果の要旨)

平沼騏一郎は、満州事変以降首相時代まで軍部と結びつき大陸政策を推進したとして東京裁判でA級戦犯の判決を下された。近年の平沼研究においては、思想性に加え首相時代の平沼が親英米的であることが強調され、同内閣以降の政治行動については、太平洋戦争の開戦には結びつかない、等の指摘がある。

本論文は、これまで十分に分析されてこなかった平沼の司法官僚時代や、太平洋戦争中と戦後も含め、できるだけ一次史料に基づき平沼の政治思想・秩序観と政策や政治手法を分析したものである。また平沼についての初めての本格的な伝記研究でもある。

本論文は、平沼の政治的影響力が最も強かったのは1930年代末の首相時代ではなく、1930年代前半であることを明らかにした。浜口雄幸内閣で疑獄事件が続発し、平沼は政党内閣に反感を強めた。ロンドン条約問題では、英米への不信感から条約締結に反対し、統帥権問題で軍部の官僚的権限を擁護した。こうして平沼は政党政治や政党の力を弱め、軍部の台頭を促進する役割を果たした。

他方、平沼はロンドン条約反対派の陸海軍軍人を提携相手とし、首相の座を狙った。平沼は軍部を抑えられる文官であることをアピールする一方、軍部に対しては協力姿勢を示すことで、双方から支持を獲得しようとした。しかし、平沼は元老西園寺公望から支持されず、この時には首相になることができなかった。

首相時代の平沼は、対米英関係の改善を考慮するが、ソ連を対象とする日独防共協定強化を陸軍とともに推進しただけに終わる。これは三国軍事同盟につながり、後に日米開戦の原因の一つとなる。

さらに本論文は、司法官僚時代の平沼が、山県有朋と思想的に類似していたが、長州系でないため疎外されたので、政友会と連携したことを明らかにする。平沼は、政友会の力を背景に、司法部改革や検察権の柔軟な運用を行い、司法部における権力基盤を確立した。しかし、平沼は内心天皇主権説であり、政党内閣を嫌い、一貫して官僚的権限を擁護した。

また平沼は、第一次世界大戦後の思想・社会変動に危機感を持ち、反共・反政党の立場から政治家への転身を図ろうとし、内大臣等としての宮中入りや首相を目指したことを示す。

これまで思想性が強調される傾向があった平沼像に対し本論文は、平沼は思想的というより強い権力志向を持った政治家であり、むしろ機会主義的でしたらあったことを論じ、平沼の実像形成に寄与した。

よって、本論文は博士（法学）の学位を授与するに相応しいものであり、かつ、学界の発展に資するところが大きく、特に優れた研究であると認められる。

また、平成27年2月3日に調査委員3名が論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。